

1964と 変わるコマザワ

2020年 10月1日(木) ~ 2021年 7月22日(木)

● はじめに ●

1964（昭和 39）年、日本にとって念願の東京オリンピックが開催され、国中は大いに沸き立ちました。オリンピック開催にあたり、1960年代の日本では、高度経済成長のもと、急激なインフラ整備が行われ、世田谷区や本学がある駒沢地域も大きく変貌していきました。

時を同じくして、1962（昭和 37）年には、駒澤大学は開校 80 周年を迎え、また第一次ベビーブームで生まれた世代が大学入学年齢になることから、学生数の急激な増加が予想されるなど、大きな転換期にありました。

それから約半世紀を経て、次の東京大会の開催を控えた現在、人口減少・少子化など、半世紀前とは異なる課題が生じ、駒沢地域や駒澤大学にとっても新たな局面を迎える時代となったといえます。

駒沢地域と駒澤大学の変化に大きな契機をもたらした、1964 年の東京オリンピック前後の時代をふり返ることで、次の半世紀への展望のきっかけとなれば幸いです。

● 1964 と世田谷・駒沢 ●

オリンピックと世田谷 世田谷は、世界でも類を見ないオリンピックとの関わりが深い地域である。オリンピックと世田谷の関係は、1940（昭和 15）年に開催を予定しながら戦争により断念せざるを得なかった「幻の東京オリンピック」に遡る。この時に造られたのが馬事公苑であり、選手村は砦、主会場は駒沢（現駒沢オリンピック公園）周辺となる計画であった。2020 年東京オリンピックで馬術競技会場となる馬事公苑がオリンピックの開催準備を行うのは 3 度目のことで、世界に誇る実績といえる。

「幻の東京オリンピック」中止後も、駒沢には 1949（昭和 24）年には第 4 回国民体育大会の会場としてハンドボール場やホッケー場が建設され、その後も 1953 年に硬式野球場（駒沢球場）、1958 年に第 3 回アジア大会会場としてバレーボール場、弓道場が建設され、1964 年東京オリンピックでは第 2 会場に選出された。

1964 年前後における駒沢の変化 戦後日本の経済復興は、神武景気（1954 年 12 月～1957 年 6 月）、岩戸景気（1958 年 7 月～1961 年 12 月）、オリンピック景気（1962 年 11 月～1964 年 10 月）、いざなぎ景気（1965 年 11 月～1970 年 7 月）と続く高度経済成長により急速になされていった。1964（昭和 39）年東京オリンピックは、アジア地域初の開催であり、戦後日本復興の象徴でもあった。1964 東京オリンピックに際して国内外から多くの人々を迎えるため、東海道新幹線開通、首都高速道路の建設など、1950 年代後半から 1960 年代にかけて大規模なインフラ整備が行われていった。特にオリンピック第 2 会場であった駒沢オリンピック公園

周辺は、第 1 会場と選手村のある代々木から選手を輸送するために急速な道路整備がなされ、大きく姿を変えていった。



大学正門前の通り 1963（昭和 38）年
『駒沢新報』61 号（1963 年、本学図書館蔵）より



現在



曹洞宗大学
(現駒澤大学)

駒沢ゴルフ場
(現駒澤公園)

駒澤大学と駒沢公園（当館蔵）

1931（昭和6）年



1965（昭和40）年

玉電と世田谷の発展 玉電の愛称で親しまれた玉川電気鉄道は、日露戦争後間もない 1907（明治 40）年に渋谷～玉川間（玉川線）が開通した。玉電は旅客輸送の他にも、コンクリートの材料となる玉川の砂利を、都心の建設現場へ輸送することを目的として設置された。そのため「ジャリ電」とも呼ばれた。1923（大正 12）年の関東大震災を契機に、都市部から郊外への人口流出と、郊外の宅地化がもたらされた。玉電沿線では旅客誘致のための行楽地や住宅地、電力供給事業などの開発がよりいっそう進み、これによって世田谷地域は大きな発展を遂げた。

地下鉄の開通 本学が現在の駒沢に移転してからというもの、玉電は教職員や学生たちの重要な交通手段であった。だが、1964（昭和 39）年の東京オリンピックを契機に、国民の主要な交通手段が自動車に移り、国道 246 号線の交通量が爆発的に増加した。路面電車である玉電は、次第に渋滞や事故を引き起こす原因となってしまった。玉電は 1969（昭和 44）年、現世田谷線となる三軒茶屋～下高井戸間を残して廃止された。1977（昭和 52）年、玉電に代わり新たに開通したのが、地下鉄の新玉川線である。新玉川線は 2000（平成 12）年に全区間が田園都市線に統合され、現在の姿となった。



玉電に乗り込む駒大生 昭和 30 年代（当館蔵）



渋谷～二子玉川間を結ぶ連絡バス（地下鉄工事中）
1970（昭和 45）年（当館蔵）



沿線案内 東横・目蒲・玉川電車
1937（昭和 12）年（当館蔵）

沿線の開発と行楽地化に伴い、こうした案内図が刊行され、旅客の便宜が図られていた。本図では、玉川電気鉄道に属する路線として、本線玉川線（渋谷～玉川）のほか、支線の溝ノ口線（玉川～溝ノ口）・下高井戸線（三軒茶屋～下高井戸）・砧線（玉川～砧）・中目黒線（渋谷橋～中目黒）・天現寺線（渋谷～天現寺）が描かれている。



地下鉄「駒沢駅」設置運動 学生署名用紙
1970（昭和 45）年（当館蔵）

本学学生が使用した駒沢駅実現の署名用紙。本学では教職員・父兄・学生一丸となって、駒沢交差点への地下鉄「駒沢駅」設置を求め、署名運動を行った。これに対して東急は「駒沢公園駅」を真中交差点（現在の駅の位置）に設置する案であった。両者の設置場所をめぐる争いは行政訴訟に発展したが、結果的には東急が勝訴し、協定策として駅名は「駒沢大学」となった。



地下鉄「駒沢駅」設置運動のほり旗 一九七〇（昭和四五）年頃（当館蔵）

● 1964 と駒澤大学 ●

新制大学の誕生と学部増設 GHQ の管理の下に民主化が進んだ戦後日本は、教育の機会均等を掲げた。戦後の私立大学は、戦火による学生数急減と経済的困窮の中にあったが、一握りのエリートのための教育機関から社会的に開かれた新制大学に変化する過程で、徐々に復興していった。

駒澤大学はそれまで曹洞宗の僧侶育成を目的とした大学であったが、1949（昭和 24）年からの新制大学化に伴い、教員を大幅に増員して文学部・法政学部・商経学部の 3 学部を新設した。また女子学生の募集を始め、学生数は新制大学化以前の 2 倍程度にも増加した。

学生数の増加と建設ラッシュ 1964 東京オリンピックが開催された 1960 年代は、駒澤大学も大きな転機を迎えた時期であった。すでに新制大学化によって急増していた学生数は、戦後生まれの「ベビーブーム世代」が入学する 1965・66（昭和 40・41）年頃には、さらに増加することが予想された。このため 1960 年から 70 年代にかけては、大規模なキャンパス拡張や新校舎の建設、教員の補充が行われた。加えて、1962 年の本学開校 80 周年の記念事業として講堂兼体育館や図書館が新設され、1960 年以降の駒澤大学は目まぐるしい発展を遂げていた。

なお、体育館はオリンピック競技の練習場とするべく、オリンピック組織委員会の要請と補助を受けて新設されたものである。

開校 80 周年 1960 年代における駒澤大学の目覚ましい変化は、開校 80 周年を視野に入れたものでもあった。本学は 1962（昭和 37）年に開校 80 周年を迎え、これを記念に多くの事業に着手した。まず出版関係では初のまとまった大学史である『駒澤大学八十年史』や、『新纂禅籍目録』などが発刊された。建築関係では、新講堂兼体育館や図書館をはじめ、10 以上もの施設が新築・整備された。そして教育関係では、大学院やエクス線技師学校の拡充、短期大学や付属高校の新設などが行われた。



完成した体育館の落成式
1964（昭和 39）年 5 月 30 日（当館蔵）



ソ連（現ロシア）女子バレーボールチームによる体育館での練習風景 1964（昭和 39）年
体育館は 2015（平成 27）年まで現在の種月館（3 号館）の場所にあった。（当館蔵）



岩見沢・苦小牧での地鎮式・着工の記事 1963（昭和 38）年
『駒沢新報』61 号（1964 年、本学図書館蔵）より

駒大の北海道進出 1950（昭和 25）年の北海道庁設置により道内の人口が急増し、本学にも北海道からの学生が増えた。寄宿舎や教育設備の不足を解決するべく 1964（昭和 39）年、北海道教養部が設置された。

新制大学は教養課程と専門課程を 2 年間ずつ学ぶことが定められており、岩見沢教養部は大学の教養課程の 2 年を過ごすために設立された。翌年には短期大学となり、新たに国文科が開設された。同年は苦小牧にも短期大学が開校し、英文学科と国文科が開設された。また同時期に、初の曹洞宗立の高校として、駒澤大学付属岩見沢・苦小牧高校の 2 校が設置された。

野球部の躍進 1964（昭和39）年は、駒大野球部が東都大学春季リーグにおいて3年連続優勝の偉業を成し遂げ、さらに全日本大学野球選手権大会で初優勝した年でもあった。

春季リーグ3連覇によって名が広く知られるようになった駒大野球部は、1964年の内に東京オリンピックのデモンストレーション試合への参加やハワイ親善遠征など、輝かしい活躍があった。

野球部は、本学部活動の中で最初に設立された部だが、この時期から功績を残し始め、その後はプロ選手を多数排出するまでに成長した。

1964（昭和39）年10月、日本とアメリカの学生によるオリンピックのデモンストレーション試合が行われた。

日本チームの監督は駒大野球部監督の小林昭仁が務め、チームは駒大生が多くを占めるなど、駒澤大学が中心的な役割を果たしていた。チームは本学学生の他にも慶応大、中央大、法政大、立教大からも選抜され、「学生オールスターチーム」と称された。なお、試合の結果は2対2の引き分けだった。

東京オリンピック後の1964（昭和39）年12月、本学野球部は、ハワイ曹洞宗教団の招待により、ハワイへ親善遠征を行った。それまで早稲田・慶応など東京六大学のハワイ遠征はあったが、東都大学としても宗教関係大学としても、ハワイ遠征は初めてのことであった。試合出場メンバーの来島ということもあり、親善試合の観客は、今まで来島した六大学やノンプロ以上の入場者で盛り上がったという。



東都大学野球リーグ初優勝で湧く学内 1962（昭和37）年5月（当館蔵）

東都大学春季リーグ3年連続優勝の記事 1964（昭和39）年『駒沢新報』69号（1964年、本学図書館蔵）より



野球部ハワイ親善遠征の写真 1964（昭和39）年『駒沢新報』75号（1965年、本学図書館蔵）より



全日本大学野球選手権 優勝記念トロフィー 一九六四（昭和三九）年（本学蔵）



オリンピックデモ野球 参加記念楯 1964（昭和39）年（本学蔵）



ハワイ親善遠征 参加記念楯 1964（昭和39）年（本学蔵）